

東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2020

「考えて生きる ～大学は知の宝庫～」

第3回 10/21 (水) 13:30～15:00 報告

源氏物語を考える ～大学は知の宝庫～

講師 木戸久二子 (本学教授)

於：図書館大セミナー室

◆◆◆◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*

令和2年度第3回公開講座(受講者33名)が10月21日に開催されました。短期大学部教授の木戸久二子先生による「源氏物語を考える」と題された講演は、2000年に発行された「二千年札」の図柄の解説から始まりました。

小渕首相の時代にミレニアムということで発行が決定された二千年札は、実在の人物をモデルにしていない点や、金額が偶数であること等、これまでの紙幣とは異なっていました。表面には沖縄の守礼門が描かれ、裏面は源氏物語にちなんだデザインとなっています。複数の絵巻から抜粋する形で描かれた裏面で注目すべきは「鈴虫巻Ⅱ」の絵です。その右下には同巻Ⅰから引用した詞書が書かれています。

次に、変体仮名について解説をいただきました。変体仮名とは、現代の平仮名とは異なる字体です。例えば、私たちが用いる「の」は「乃」から生じた字ですが、絵巻のなかでは「農」という文字の仮名が使われています。同様に、「ゆ」は「由」から生じた字ですが、「遊」という仮名で出てきます。

全54帖からなる源氏物語は、4代にわたる80年近い年月における、光源氏を中心とする400人以上の人々の関わりが描かれています。400字詰め原稿用紙に換算すると、2500枚にも及ぶ超大作です。この物語は三部構成となっており、最初の33段は桐壺帝の御代から始まり、光源氏の栄華の日々が描かれます。8段から成る第二部は、光源氏が罪の意識にさいなまれ因果応報と孤愁を感じ、出家を志すところまでです。第三部は、光源氏の子ども、孫たちの物語です。源氏物語の面白いところは、余韻を残して終わっている点です。源氏は果たして本当に出家したのか、出家した後どのような生活を送ったのか、最期はどうなったのか。宇治川に身を投げ、一命をとりとめた浮舟は、その後も言い寄る薫や匂宮に対してどう振る舞ったのか、その後の人生をどのような形で過ごしたのか、読み手である私たちの想像力が試されているといってもよいでしょう。紫式部はこの物語を通して、宗教も決して救いになるとは限らない、人間としてどのように生きてゆけばよいのか等を読者に投げかけています。

さて、1100 年代前半に作られた源氏物語絵巻ですが、絵画の技法には二つの特徴があります。それは、「吹抜屋台（ふきぬきやたい）」と「引目鉤鼻（ひきめかぎばな）」です。前者は、建物の屋根と天井を取り払って、あたかも斜め上から俯瞰したかのように描く絵画手法のことです。斜め上からの構図によって、あらゆる仕切りとそれが表現するあらゆる人間関係が、絵を見る者に強く意識化されます。後者は、細長い線で目を引き、鉤状に小さく「く」の字形に鼻を描くことです。しもぶくれの顔におちょぼ口といった様式のなかに、腹立たしく思う様などの微妙な心理が描かれています。実物は、五島美術館（東京都世田谷区）に 4 段、徳川美術館（愛知県名古屋市）に 15 段、それぞれ所蔵されています。ここで、最先端技術を駆使した復元模写を見ました。「蓬生」と「夕霧」の巻はいずれも見違えるほど色鮮やかで、蓬の生えている様子、月明かりによって足元が白っぽく描かれていること、夕霧の妻の怒った表情なども容易に見てとれました。

次に朗読を聞きました。平安時代の読み方を再現したもので、ゆっくり、高齢の女性らしく語られ、発音が現代と違う点も分かりました。音を文字に表すと、「たあていとうてえとお」「ふあふいふうふえふお」といった音です。また、現代ではあまり使われない鼻濁音も確認することが出来ました。源氏物語は 30 以上の言語に翻訳され読まれています。平成になってからは、瀬戸内寂聴、橋本治、大塚ひかり、林望、角田光代各氏が訳しています。研究者ではなく作家や著述業の人たちによる訳は個性あふれる作品に仕上がっているようです。ちょっと手にしてみても読みやすいものを選び、面白いと思える部分から読んでみるのもよいかもしれません。

【講座の様子】

